

〈地域構想フォーラム〉

五葉山フォーラム—五葉山に学ぶ～共に生きるかたち～

千葉修悦

五葉山自然倶楽部事務局長

1. はじめに

「五葉山」を介し、自然と人間の共生、人間と人間の共生のかたちを考える「五葉山フォーラム」を、2012年12月2日、五葉山自然倶楽部が主催して、岩手県東南部に位置する住田町で開催した。最初に東北学院大学副学長の佐々木俊三先生による「共に生きるかたち～厄災と経験～『食べること』と『住まうこと』」、次に岩手大学農学部教授岡田秀二先生による「自然との共生～響き合う感性～」、最後に山形大学東北創生研究所コーディネーター准教授の村松真先生が「草木塔の意義～東日本大震災を生きる～」の3つの講演が行われた。このフォーラムが問い、示唆するものを、各講演の内容と参加者の感想、そして地元紙「東海新報」に掲載された「参加者の声」を通して考えたい。

2. 講演1:「共に生きるかたち～厄災と経験～『食べること』と『住まうこと』」

仙台市八木山に住む佐々木俊三副学長のご自宅があのだ日本大震災で全壊した。その時の状況を次のように述べられた。

「その日、私は夜になって自宅に帰ることができました。1階のガラス戸がみんな壊れ、書棚からは書籍が散乱し、食器棚からは崩れ去った食器類が足を切るばかりの山のような破片になって散乱していました。もぬけの殻となったガラス戸からは、夜の寒い風が入り込み、カーテンを風になびかせています。私はあの光景を忘れることはできません。電気もガスも水道も来なくなった風通しの良い部屋の中で、私はまんじりともせずに、起こった事の意味と影響について考え続けていました。」

後に人々は足りないものを持ち寄り、助け合い、集い、食事をした。その時の光景がこのたびの演題となった。佐々木副学長は、日々の営為のなかにある当たり前の光景に焦点をあて、生きることの根源について指し示してくれた。

1) 講演の内容

東日本大震災が圧倒的な仕方で私たちに直面させたものは、まさに深い意味での「経験」でした。「経験」は、私たちの身体に傷をつける仕方で襲います。私たちは震災によって、生への限界へと露呈されたのです。お金も家も銀行も信用も産業も経済も、そして行政も政府も効果を持つことのない生への限界へと私たちを送り込み、つまりは私たちを持つべきものの裸へと送り込んだのです。私たちは文字通り無に晒されました。

さらに裸に晒された経験ですが、奇妙にも、普段おつきあいのない近隣の方々が、それぞれに足りないものを持ち寄り、手助けをしてくれる光景に出会いました。まさに助け合いの共同性です。数日を経て、散りちりになっていた家族も集まってきた、ろうそくの光と即席のコンロで、頂いたご飯を温め、まるで昔、人々が夜、炉辺の周囲に寄り集いながら食事をした原初の光景に帰ったかのような小さな温かさの集いとなりました。懐かしい親密さの経験です。そしてこれは、私たちが忘れ去っていた何かだったと思いました。

「食べる」ことは「食べ合う」行為なのです。たとえ私のお腹が減っていたとしても、みんなが食卓に着くまで「食べる」ことを待たねばなりません。そして1日無事で生きながらえたことへの感謝をしつつ、自分に配分された食べ物を食べ、同じ食物を分け合い、食べ合うのです。「食べる」ことの後に団欒が訪れます。満たされた食感と、

その1日に起こった出来事について語り合い、休息し合うのです。「食べる」ことはこうした一連の行為を意味していました。

家の原型とは何かと考えたとき、それは、あの粗末な竪穴住居に遡ると思います。その竪穴住居の中央には、炉がしつらえてあり、そこに火が灯っていたのです。家の中心、住まうことの中心には炉が無ければなりません。このように生かされていることに感謝しつつ、食べるものを賜り、食べさせていただくことに感応し、食べることへの感謝とともに食べ合うことの絆を強めて来たのは、まさに台所の火によって可能だったことになります。

震災は私たちを裸に晒しました。裸になった私たちが、生活をもう一度立て直そうとするとき、余分なものを捨て去って、何が大事なことなのかに着目するとき、見えてきたことは、『食べること』と『住まうこと』でした。そこで配慮されたものは、共同性における個への配慮だったわけです。

2) 参加者の感想—「レスポンスカード」より

フォーラムの参加者は佐々木副学長の講演をどのように聞かれたのか。印象に残ったことや感じたことなどを「レスポンスカード」から紹介する。
・共同ということについて—「共同の食事によって得られる結合、小さいけれど日常のつながりが、家族を小さな絆から集落や社会的つながりへと発展させ、歴史を形づくってきたのだと思いました。もっと共同の意味するものを大切にするように考えてみたいと思います。」(大船渡市50代男性)

・便利さや効率を追い求めた結果について—「『住まうことと食べること』ということから、生きる原点が災害を通してあらわになったということだと思いました。食料を外国に依存し、建材も輸入に頼る現在、日本はこの先、考えることがいっぱいあります。」(宮城県丸森町60代女性)

・食事をする意味について—「若い世代の食のあり様が心配であることと、その親世代が利便性だけを追い求めてきたこと、労力はあるが食事を通して共に生きていくことが必要であることをあら

ためて知りました。」(60代男性)

・幸福感について—「便利さを追求する社会で私たちは、大切なもので失ったのではないかと、そしてその末にたどり着いたのが『食の劣化』。便利さを追求しても必ずしも幸福は手に入れないということを感じました。改めて食べることの大切さを実感しています。」(奥州市40代男性)

・助け合う心の喪失について—「人間の生きる力、家族(先祖)への感謝、地域の共同社会、神社や仏のことを聞き感動しました。利益や成果だけを求めたことによって、助け合う心、結いの精神、共助の考え方が無くなったことをあらためて知ることとなりました。小学生、中学生、高校生、大学生、それぞれの時期に時間をかけた教育が大切であると感じました。」

3. 講演2:「自然との共生～響き合う感性～」

岡田教授の学究としての視座は、常に人々の営為が刻まれた農山村の暮らしにあり、そこに生きる人々に据えられている。「五葉山との係わり方の問題としてだけではなく、われわれ一人ひとりの生き方や、今後の社会経済・国のあり方にもかわる大事な課題」として講演に臨み、自然との共生について自らが体験し、感じたことを話され、西欧人や日本人の自然の捉え方や、自然との共生を実現させていくための考え方が示された。

1) 講演の内容

自然との共生について、今日、世界は、環境倫理という形で倫理の問題に、問題の解決と私たちの姿勢の枠組みを見出しています。しかし、私はそれを乗り越える必要があると思っています。具体的には地域の共同体や風土と言われてきたものの今日的捉え返しの必要性和、一人ひとりの自然との関係における、自然を単に環境や利用対象としてだけから捉えるのではなく、私たちが生きていく上で必要でもあり、また大事な、目には見えないけど自分を含む集団を支える何か、あるいは意味をもつもの、ないしは象徴として存在していることについて、了解するということです。

五葉山登山の時は、不思議なことにバイカウツ

ぎ、ゴヨウサンヨウラク、ヨウラクツツジなど五葉山に特徴的な植物がいわば親しげに声をかけてくる。小鹿もいつまでもこちらを見て何かを言っている風です。マツもナラもブナも、いずれも苔むして悠久の時を感じさせ、人間の時のかなさを思わせる。いわば目線が同じ高さになり、動物も草木も岩や土までも親しい仲間のように思えました。

そこにはきっと私自身をめぐるある状況も影響していたのかもしれませんが。それは、いつも、それは大きな口をあけてよく笑っていた子供が、いつの時からか、うずくまって口数も少なく、覇気がなく、返事も動作も虚ろで、とても心配はしていますが、私にはなにも出来ずに、ただただ心配し、思い悩んでいたのです。それは、同時に私自身の状況ともなっていたように思えます。

きっとそこには、小さな個人が巨大システムの今日社会で生きていく上での様々な軋轢、抑圧、そして我慢、痛みが渦巻き、押し潰されそうな状況があったのであろう。個人と社会の関係の望ましい姿とは。主体性とは。人間とは、何なのか。人間回復、その子供の「生」の取り戻しはどうしたら可能なのか。そんなことを考えることが多かったと思います。

五葉山の自然は、動物も、草花も、木々と岩石たちもみんな生き生き輝いていた。「山川草木悉皆成仏」とは、実は、自然のもののすべては「成仏」だが、人間だけがわだかまりを持ち、「私」と「自分」を主張し、社会と折り合えずにいることを教える言葉ではないのか。

五葉山の山行きは人が人としてまともであることとはどういうことかを教えてくれた。五葉山は少なくとも私には特別の山なのです。

2) 参加者の感想—「レスポンスカード」より
・共生の心について—「大震災で多くの被害が出ました。そのとき“私に何ができるか”と言える、そしてそのことを実行できる人間の育成をどのように進めていけばいいのか。自然観を持つこと、地域に根差した生活をともなった実践的活動を通して共生の心が育っていくことの大切さを学びま

した」

・忘れ去られた自然観について—「日本人が自然観について忘れてしまったということは、教育することの欠如を意味します。地域の資源である『国土』はいったい誰が守っていくのだろうか。都市生活者も国の役人も政治家もこのことを真剣に考える必要があります。そしてこうしたことを地域から発信していくこともまた必要です」

・自然を管理、制御できうるか—「地域の特性を生かしつつ、自然の許容範囲のなかでの共生は成り立たないということ、人間が自然を管理する、抑制することは間違いではないか、ということに共感しました」（奥州市40代男性）

・自然という言葉について—「日本語のなかには『自然』という単語はなく、Natureの訳語として近代以降に生まれた単語と言うことでした。『自ら然り』とは正に的を得た言葉であると思います。地域の資源のなかで循環する社会、生活の仕組みをつくりだしていけたらいいと思います」（大船渡市50代男性）

・循環型の地域づくりについて—「共生、感性の根幹にあるものは何か、共生の個性ある循環型の地域づくりをいかに進めるか、地域の自然、共同を創り上げることの大切さなど、多くのことに気づかされました」（住田町60代男性）

・地域の自然について—「地域の自然の個性を考えていきたいし、それを生活のエゴのバランス、共生ということについても答えが出るかどうか分かりませんが、考えていきたいと思います」（大船渡市30代女性）

4. 講演3：「草木塔の意義～東日本大震災を生きる～」

村松准教授は、日本人の草木に対する精神文化である「草木塔」の今日的な意味を通して、自然と人間の共生のかたちを語りかけた。

1) 講演の内容

自然を大切にしてきた日本人が、いつのころからか自然は制御できるものと思いこみ、自然への畏敬の念を忘れてきた。今ほど自然と人間の共生

が求められている時代はないように思える。私たち日本人は、樹木に対して特別な気持ちを持っている。山形県東根市に樹齢1500年の日本一のケヤキがあり、しめ縄が掛けられ神木として地元の人々の信仰の対象となっている。こうした「古い」「太い」「高い」樹木に不思議な力を感じ、敬い、畏れ、信仰の対象にするような情景は日本各地で見ることができる。

人間の生存と草木の間に親密な関係性を見出す象徴が「草木塔」であり、供養塔の形で具現化されているものと考えられる。

哲学者の梅原猛は、草木塔について次のように説明している。草木塔は、日本仏教の山川草木悉皆成仏（さんせんそうもくしっかいじょうぶつ）という思想を表したものである。この思想は、日本人の草や木に生きた神を見る思想、一木一草に神性を見る土着思想であり、人間の生命と草木の生命の密接な関係性を表したものである。

現代文明は便利さや快適さを追い求め続けてきた。それが如何にもろく、危ういものであったのかを東日本大震災さらには原子力発電事故が引き起こした放射能汚染が教えてくれる。今こそ草木塔が語りかける意味を考え、日々の生活に体现していくことが求められている。

陸前高田市や大船渡市の復興が進んでいく状況を見る度に、被災地の皆さんの未来が明るく希望に満ち溢れたものであることを祈らずにはいられない。そして、草木塔の精神は、東日本大震災後の世界を生き抜く多くの人々の拠所になることと確信している。

2) 参加者の感想—「レスポンスカード」より
・知恵を役立てること—「知識と判断を組み合わせ知恵にし、生活に役立てるということに共感しました。日々の生活のなかで、さまざまなことを感じ取り、考えていくことが大切であると思いました。震災のとき、私は大船渡に居ました。あのときの大津波警報のサイレンの音とアナウンスを今でもはっきり覚えています。あの放送のなかでも避難しなかった人もいました。考えることを辞めてしまい、判断を誤ったことが惜しまれます。

自然を敬い、共存することの大切さをあらためて考えさせられました」（奥州市40代男性）

・人間の思いあがり自然を破壊—「人間が一番偉いんだ、だから自然を意のままにできるという思いあがり、自然を破壊してしまうことになります。植物や動物を大切にすることを全ての人が持ち合わせればと、思います。」（宮城県丸森町 60代 女性）

・印象に残った「知恵」と「経験」の話—「『自分が幸せに生きるために知恵と経験を大切にすること』ということが印象に残りました」（大船渡市30代女性）

・気づかせてくれた自然への感謝—「『草木塔』の話、歴史の勉強になりました。自然に対する感謝、現代への警鐘を気づかせていただきました」

5. 東海新報「参加者の声」から

3人から寄せられた「参加者の声」のうち、テーマに密接する箇所を紹介する。

1) 自然との共生を考えあう～再考したい現代文明（大船渡市日頃市町 中嶋敬治）

日本人は、明治の開国によって多くの考え方を欧米から取り入れました。自然に対するものの見方もその一つです。それまでの日本は、身の周りの環境を大きく改変することなく、自然の仕組みの中で巧みに利用していたこと、それこそが自然との共生です。「nature」という言葉に対する訳語がなく、「自ら然り」すなわちあえて意識するものがない存在が、今私たちが使う「自然」という言葉になったといいます。そこには作り変える考え方は存在せず、その中で生かされることを是としてきた日本人の自然観があったといえます。

高度に発達した近代文明によって、地形や地勢だけでなく、野の生き物たちまで自分たちの都合がよいように扱ってきたおごりが、今現実の問題として突きつけられています。文明から離れて生きていくことはできないのですが、一度立ち止まって考えることはできるのではないかと思います。

常に「害獣」扱いにされる森の生き物たちの、

訴えるような眼差しが、私の脳裏から離れることはありません。

2) 考え続けたい自然との共生のかたち～原発事故が奪った生き生きした表情～（宮城県丸森町 今野市子）

原発事故は、あたりまえの生活を脅かし、落胆と言いやうのない悲しみの淵に追いやった。ささやかな希望さえも持ちにくくしている。それでも、畑で採れる野菜はなんとか食べることができ、そのことがこの地に今も住み続けられる大きな理由となっている。

便利で豊かな暮らしを手に入れようと、生活様式は変容してきた。日々の家庭ごみを処理して気づくことは、包装用のプラスチックのごみの多さである。かつて納豆は、木を紙ほどの薄さに削ったものに包まれ、三角の形を成していた。菓子は、量って紙袋に入れられていた。子どもは布おむつで育てた。文明は、便利で快適な暮らしを求めることを是とし、そのことを自明の理として突き進む。楽で便利になると「もっと、もっと」とさらなる欲求が続くが、震災以降特に「これでいいのだろうか」と、思うことが多い。

農村において、その土地に生き、暮らすということは、山や畑、田んぼと密接に係わることである。青々とした水田風景は、人びとが変わらず田を耕し、代かきを経、稲を植え、水見をすることで維持されている。郷土の風景に親しみや愛着が湧くのは、そこに生まれ、育ち、人と出会い、交わりを得てきたからである。いつも思うのは、丸森と同じような自然環境をもつ飯舘村のことである。村ごと避難し、窮屈な思いをし、肩身を狭くしながら生活している。震災前までは、きっと丸森の人たちと同じように生き生きしていたことだろう。

あのフォーラムは、失ったもの、かけがえのないものをあらためて思い起こさせた。こみ上げる悲しみのなかで、「かつてのあの生き生きした表情を取り戻してほしい」そう願わずにはいられなかった。今も自然との共生のかたちを考え続けている。「真の豊かさ」「本物の幸せ」とは何か。「五

葉山フォーラム」は、ひとり一人にそのことを問いかけている。

3) 心のよりどころ五葉山～感謝の念を持って歩む指針～（奥州市水沢区 佐藤勝幸）

私は、将来、ウェブ製作会社を立ち上げようと夢を語り合った同級生を、あの東日本大震災の津波で失った。思いを遂げられずに逝った友はきっと無念であったに違いない。私の人生もまた順風満帆であったのではない。むしろその対極にあったと言っている。八年前に妻を亡くし、三年前には会社をリストラされ失職した。そんな私の心のよりどころになったのが故郷の山々であった。霊峰、五葉山は私にとっては特別の山である。人は悲しく辛い時後ろ向きになりがちだが、五葉山の豊かな緑、澄んだ空気、清らかな水が、訪れるたびにやさしく包み込んでくれた。自然に身を委ねることで、前向きに生きられた。

水沢の偉人、後藤新平の「自治三訣」という言葉との出会いも、生き方に力を与えてくれた。「人のお世話にならぬよう 人のお世話をするように」として 報いを求めぬように」。私には、二人の恩人がいる。一人は、妻を失い、小学一年生の娘の子育てに悩んだ時に一年間、我が子のように預かって育ててくれた。もう一人は、リストラで失職中に、現在の職場を紹介してくれた。お二人の善意を素直に受け入れられたのは、自然との共生を体験的に肌で感じ取っていたからかも知れない。五葉山麓の豊かな自然は、私を明るくさせ、喜びや悲しみを包みこんでくれたのである。人と人との係わりのなかから感謝の念をかたちにしていきたいと思うようになったのもそうしたことが根底にあったからである。

共に生きることの尊さを問いかけた五葉山フォーラム。感謝の念を持って歩む私の人生を後押ししてくれている。

6. 五葉山フォーラムが問い、語りかけるもの

現代文明は便利さや快適さをもたらしたが、そこに内在する社会の仕組みが個人の存在を危うくし、弱いものが切り捨てられる社会を生みだし、

格差が拡大している。また、あの東日本大震災は今なお深くそれぞれの胸の内にあり、戻ることのないかつての日常やもう会うことのない人を思い起こさせ、喪失感は今なお消えることはない。

一方、科学万能の安全神話に築かれた原子力発電は放射能汚染を引き起こし、生命、生活、産業基盤の危機を招き、多くの人たちがかけがえのないふるさと離れ、慣れない地域での暮らしに苦悩している。

こうした今日的な背景を持って「共に生きるかたち」について考えようと開催したのが「五葉山フォーラム」である。講演で話された言葉をたどり、「自然と人間の共生、人間と人間の共生のかたち」を顧みる。

1) 佐々木俊三副学長の講演から

①平安末期に起こった災厄の経験から学ぶ … 1177年の都の大火、1180年の辻風、1180年から1182年にかけての飢饉と疫病（4万人の死者）、1185年の大地震。方丈記、徒然草、正法眼蔵随聞記から災厄を乗り越える生き方と考え方を学ぶ。

②懐かしい親密さの経験に思いをいたす … 東日本大震災で家屋全壊の被害を受け、足りないものを持ち寄り、手助けをし、炉辺の周囲に寄り集いながら食事をする光景が、懐かしい親密さの経験を蘇らせた。

③「食べ合う」行為 … 満たされた食感と、その日一日に起こった出来ごとについて語り合い、休息し合う、そのことに意味を持つ。

④共同性における個 … 狩猟の獲物を解体してセコに分配する際の取り分「タマス」を、そこに居合わせた人びとの一人ひとりに分配することによって成り立っている私有。ここでは個は共同性において成り立っている。

⑤個への配慮 … 震災で裸に晒されたとき、余分なものは捨て去り見えてきたものは「食べること」と「住まうこと」。そこには共同性における配慮があった。

佐々木副学長はご自分の経験を通して、生きることの根源、生き方のありようを示唆された。食べ合うことの意味、それがかたちづくることの大

切さの提示にとどまらず、今日の便利で過ごしやすように思える生活が如何に脆弱なものであるかをもえぐりだした。

2) 岡田秀二教授の講演から

①自然との関係 … 地域の共同体や風土と言われてきたものの今日的捉え返しの必要性和、一人ひとりの自然との関係における、自然を単に環境や利用対象としてだけから捉えるのではなく、私たちが生きていく上で必要でもあり、また大事な、目には見えないけど自分を含む集団を支える何か、あるいは意味をもつもの、ないしは象徴として存在していることについて、了解するということです。

②「生」の根底に据えるべきもの … 人間も自然も同様に「オノヅカラ」なるものを「生」の根底に据え、それを尊重することで、主体性とか「私」というべきものが、初めて現れ出るといふべきもののなのかも知れない。自然と人間の本質は同様のものかもしれない。五葉山という空間においてはじめてそのことを諒解できたのです。

③共同体の一員としての存在 … 個人は相互に依存する人々からなる共同体の一員であることをもって存在が可能となっています。土地倫理はその共同体の範囲を土壌、水、植物、動物すなわち自然全体にまで拡大したのです。倫理の及ぶ範囲は自然全体であるとしたのです。この土地倫理によって、人間は自然の征服者から自然共同体の一構成員へと変わるのです。

④自然と共生する社会・共同体の必要性 … 人間の有する感受性や自然を思う心は、現代社会による個人や人間の抑圧からいわば窒息状況にあります。そこから個人や人間を救い出し、社会を変えていくには、自然と共生する社会・共同体が必要です。

⑤社会経済の再生・再構築に不可欠な感性の回復
桑子敏雄氏は以下のような論を展開しており、啓発されるところが少なくない。その点から実は本シリーズの全体のテーマの中にも、感性という言葉を使用しました。それは、21世紀の社会経済の再生・再構築には、感性の取り戻し、感性の回

復が不可欠であると考えているからです。

⑥自己の取り戻し … 近代的自己にあらざる本来的自己の取り戻し、すなわち豊かな感性を有する自己の取り戻しにより状況は大きく変わります。それは、空間的身体存在としての人間を取り戻すことであり、心身を別のものとは考えないこと、そして人間存在と空間の履歴を一体のものと捉えることとなります。

⑦風景において自己実現 … 自己喪失時代の今日、桑子氏は、自己の身体意識の重要性を認識し、空間の中での自己とその配置、自己を含む風景意識の自覚が大事であるといえます。風景と自己の履歴そして自己の身体的存在は不可分であり、風景においてこそ自己実現がもたらされるからです。

⑧自然と人間とそして風土 … (内山節の風土論を引いて) 存在は、孤立状態としてではなく、関係として存在しているということであり、こうした存在には存在自体にも価値があり、存在を作りだしている関係にも価値があります。

岡田教授は、一人ひとりがその存在が危うくされ、軋轢や痛みを耐えながら生きていかなければならない今日の厳しい社会状況を、「自然と人間の関係に基礎を置いた暮らし方の再生、その中に実は共生の作法、思想がよみがえる」と講演を結んだ。それぞれの存在が認められ、肯定感、充足感を感じられるような社会であってほしいとの願いが込められている。

3) 村松真准教授の講演から

①忘れていた自然への畏敬の念 … 大震災後、草木塔の存在を知った方々から問い合わせが増えている。そこに共通するのは、自然に対する畏敬心を忘れていたことに対する自覚と、自然が自分自身にとって無意識の存在になっていたことに対する深い反省である。

②草木塔に刻まれた地域の歴史 … 草木塔は、全て同じように見えるが、それぞれの草木塔には、自然を畏れ敬い草木に感謝して生きてきた昔の人びとのそれぞれの生活が刻まれており、地域を受け継いできた多くの人々の歴史が刻まれている。

③生態系を成す一員としての自覚 … 私たちは、人間を頂点としたピラミット状の体系を前提とした考え方を改め、生態系を成す一員としての存在を自覚し、その行動には常に謙虚であることが求められている。「現代草木塔」が語りかける自然と人間の共生のかたちである。

④大切にしたい自然に対する畏敬の念と謙虚な心 … 東日本大震災は、私たちに草木塔の精神を再評価するきっかけを与えてくれた。東日本大震災後に見えてきたことは、自然と人間が調和し、自然に対する畏敬の念と謙虚な心を持つことの大切さである。

村松准教授は、草木塔から学ぶ自然と人間の共生のかたちとして、生態系を構築する一員としての存在を自覚し、常に謙虚であることを強調する。

7. おわりに

「五葉山フォーラム」は、一人ひとりが持っているあるべき人間像、社会像を想像させる「内なるちから」、共に歩みたいと思う「共生のこころ」を呼び覚まし、一人ひとりの存在を認め合い、共に生きることの尊さを思い起こさせた。私たちが忘れかけ、失いかけている人間としての、社会としてのありようを示唆したフォーラムであったと言える。今後も機会を設け、ささやかではあってもこうしたフォーラムを開催していきたい。

<文献>

五葉山自然倶楽部2013「五葉山フォーラム報告書」
(A4版、70頁)